
会長は・・・

レオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

会長は・・・

【Nコード】

N6933Z

【作者名】

レオ

【あらすじ】

凜架学園、生徒会会長、美原鈴羽。

会長の目つきに生徒たちは引いてしまうほどのクールな目つきの会長。

ある日、放課後サッカー部員で癒しをもらっていると・・・?!

* 第1話*

れいかかくえん
鈴架学園・生徒会会長・美原鈴羽。
ただいま、校舎見回り中。

「こら!!そこ、走らない!」

「今急いで——ひいひい」

あたしはそいつをキツとにらむ。

「口答えしますか?そうですか?」と心の中で

20回ぐらい唱えている間に相手は強歩で

その場を立ち去った。

周りの人もさささあー・・・と引いていく。

ガタンッ

あたしは生徒会室のドアを勢いよくあけた。

「はあ・・・なんだよ、みんなひいちゃってさ」

あたしは一人ぶつぶつといいながら

席に座って書類の整理などをしていく。

今日も書類は山積みで、余裕で放課後までかかりそうだ・・・。

6時間目が終わってから、現在までぶつ通して書類作業中。

さすがに首と目と手が死んできた・・・。

でも、今日やつちやわないとね・・・

書類作業を進めてる途中、ふと校庭から聞こえる声に耳を傾ける。

『るあ!パス!』

『こつちや!こい!』

『させるかあああ!』

サッカー部の声だ。よく声が通っていて惚れ惚れするな・・・

あたしは少し休憩と自分に言い聞かせ、窓からサッカー部を観た。赤Tと青Tで分かれて試合してるらしい。

ここのサッカー部、チームワークがよくて県大会でも何度も優勝している、つわものチームだ。

「はあ・・・癒されるわあ・・・」

サッカー部員たちをみながら窓際に頬杖をつく。

パアツと簡単に部員たちを見てると、一人だけベンチに座って見ている人がいた。

「ちょ・・・やばい・・・イケメンだ・・・!」

あたしはうつとりとその男子を眺める。背、高いなあ・・・
何で試合出てないんだ?怪我してる?

そんなこんなで、5分ぐらいたって

あたしは我にかえる。

「書類作業作業・・・!こんなときに限って何してんだ・・・」

また席に戻って作業を始める。

・・・が、どうしてもさっきのイケメンをまた見たくなくなってしまった。

どうしようもない、この見たい感にあたしは負けた。

あたし以外は知らないけど、あたしはイケメン大好きなのだ。

だから、作業の合間合間にサッカー部員で癒されている。(毎日)

もう一度窓から覗くと、不意にベンチに座ってる男子と目が合いあわあわと窓から首を引っ込めた。

・・・あぶなかつたあ・・・

もう少しで秒殺ところだった・・・

次はしっかりと気合いを入れて作業に取り掛かけようとしたときだった。

コンコンッ

あたしはノックで自分をいつもの美原会長に戻した。

「はいつて。」

「失礼しマース」

がらつと入ってきたのは・・・

背の高いイケメン・・・そう、さっき言っただけイケメンだ。な、なんでここに・・・?!

「えつと・・・用件はなに？」

いつものあたしで精一杯答える。

でも顔はいまだにほっててる。

み、みてたつてばれてない!?!?!

あたしはあたふたしていた。

そして、次のイケメンの言葉に

あたしは思い切り赤面してしまった。

「俺の事ずーつと見てたでしょ?かいちよーさん?」

ぶわあつつと頬が熱くなるにつれて

あたしの鼓動はとても早くなっていた。

第2話

「な、なんのこと？」

とりあえず否定してみる。

けど、多分いや絶対に無意味だ・・・

「否定権無しだろ？さっき俺とめえあったとき
あわあわと顔引っ込めたくせして」

「うっ・・・やっぱ見てた・・・？」

さすがに恥ずかしい。

あたしがイケメン好きってばれたんだよね・・・

「まあ、かいちよーがイケメン好きってのは

だーいぶ前から知ってたけどね」

「は!？」

さすがのあたしも声を張ってしまった。

「なんで知ってたの!？」

「1年のときからずーっとサッカー部員みてただろ？」

「・・・ハイ」

やられた。

ばれてたなんて思いもしなかった。

あれ・・・1年から知ってるって・・・？

「も、もしかして先輩?!」

「ビンゴー」

ま・・・まさか・・・先輩だったとは・・・

「す、すみません・・・」

「なにが？」

「いや・・・なにがってかどこまでも・・・」

「別に俺はいいんだけど。てか、俺の事今日まで知らなかったわけ
？」

「ええ、まったく存じて居りません・・・」

「珍しいな？俺、鈴架学園No1にもてるんだけどな」

「あー・・・すみません、そっち系まったく興味ないんです」

「イケメン好き、なのに？」

「うっ・・・ええつとですね・・・あたしご・の・み！のイケメン好き、なんで・・・」

「じゃあ、俺は会長好みと？」

「Yes・・・」

「くっ・・・会長つて意外と面白いな？」

「さあ・・・そうなんでしょうかね・・・。目つき悪いのに変わりはないですけどね・・・」

「そうか？あ、わかった髪の毛だ」

そういうと先輩はあたしを引き寄せてくるつと反転させて、髪の毛を上げた。

「や、ちよ、せんぱい!？」

ぱちんつと音がる。

な、何の音!？」

「ほら、くくつたら全然かわいいじゃん」

またくるつと反転させて

ドアで反射したあたしを見せた。

いつも髪の毛をたらしっぱなしのあたしは自分が髪の毛を上げている状態に違和感を感じた。

「どうよ??」

「・・・なんか変な感じですね」

「いつもたらしっぱなしだからだろ」

「まあ・・・そうなんですけどね・・・」

そこからは完璧に沈黙が続いた。

あたしはふと、思ったことを質問した。

「あの・・・先輩、なんでサッカー出てないんですか・・・？
まだ引退ははやいんじゃない・・・？」

「ああ、俺、脚怪我してんだよ」

「へ！？大丈夫なんですか？！」

「まあ、ちよつとした打撲だから。大丈夫」

「なら、いいんですけど・・・」

やっぱり心配だった。

あたしの心の気づいたのか先輩は

あたしの頭を撫でて

「大丈夫心配しないで」

さすがにちよつと恥ずかしくて「書、書類作業に戻ります、お大事に・・・」

といて席に戻った。

「あ、俺ちよつと見といていい？」

「へ?!え、あ・・・はい」

あたしはなぜこんなに不自然な返事をしているのだろうか。
とりあえず書類作業を進めていく。

目の前で見学している先輩がものすごく気になるけど・・・

「サッカー・・・戻らなくてもいいんですか？」

「別にいいんだよ、どーせでないし」

「そう・・・ですか」

・・・戻ってほしいような戻ってほしくないような・・・

面倒くさいこの気持ち

・・・いったいなんなわけ？

* 第3話 *

「そーいえば俺かいちよーの名前知らないな」

「へ?!」

さつきまで沈黙だったのに

いきなり先輩がしゃべったものだから

びっくりしてしまった。

「え?そこまで驚く?」

「あ、いや仕事に入り込んでたんで・・・」

「ほんと、かいちよーは真面目だね。もう少し気楽に生なよ」

「それは無理です。くそ真面目に生きないと世の中たえられないですよ」

「ま、いつか絶対苦しくなると思うけど。そのときは俺を頼りな」

「な、なんでそうなるんですか!」

「だって俺の事好きなんだろ?」

「・・・顔が、ですよ」

何の会話だ・・・これ

どうでもいい話をあたしはべらべらと・・・

「ふ〜ん・・・。で、かいちよーさんのお名前は?クラスも言ってくれ」

「あ・・・美原鈴羽です。2 - Aです」

「俺は久仁江田哉也、3 - B。あらためてよろしく」

ニコリと笑う先輩に思わず見とれる。

・・・かつこいい・・・

「そんな眼見されても困るよ・・・?」

「!!!!す、すみません!」

「いや、別にいいけどね。てか、かいちよー?もうすぐ6時回るよ?」

まあ、まだ外明るいけどさ」

「6時ですか・・・まだまだ帰れそうにないですね」

「え、何時にかえんの？」

「8時ぐらいですよ」

「え！？学校に許可得てるの？」

「はい、なので堂々と8時までやってますよ」

「でも8時って結構暗いんじゃない？」

「・・・大丈夫、です。どうせ一人なので。」

そう、どうせ一人。

家には誰もいない。

父も母も兄弟も。

「ご家族心配す・・・」

「先輩、サツカー、試合終わったみたいですよ、行って下さい」

あたしは先輩の言葉をさえぎる

「俺別に・・・」

「良いから行って下さい。部活のサボりは許しません。」

ほら！早く行って！！」

あたしは先輩を無理やり廊下に追い出し

ドアを閉めた。

「・・・ご家族なんていませんよ・・・先輩」

だって、あたしの家族・・・

「殺されたんですから・・・」

さすがにやばい。

涙があふれる。

このごろその話に触れていなかった分だ。

あたしはペタリと床に座って泣きじゃくった。

すると、ドアがあいた。

あたしは気にしずにないたままだったけど

不意に後ろから抱きしめられてびっくりした。

「先輩・・・？」

「ごめん、俺のせい。まじでごめん」

「いいんです・・・慣れてるので・・・はやく部活行ってください」
「でも・・・」

あたしは先輩から離れて、先輩に笑いかけた。

「過去は過去ですから、ね。うん、そうです。いってらっしゃい」
先輩は「わかった」といって、生徒会室を出て行った。

あたしはまた、席に着き書類作業に戻った。

「集中、集中・・・」
とにかく集中した。

・・・悲しい過去を見えなくするにはこれしかないのだ。

「後、イケメンを見る・・・」

自分でも怖いほど最近

イケメンが大好きになってしまった。

「先輩なんてど真ん中ストライクですよ・・・」
窓を見てなんとなくつぶやいた。

普通、きもちわるいでしょう？1年からずっとサッカー部員を
目の保養にしているなんて・・・」

最後はすごく小声になってしまった。

いやでも、恥ずかしいものだ・・・

「別に？俺知ってた身だし。最初はいいつなんだ？って思ってたけ
ど、

徐々に違和感もなくなってきたし、今となっては、今日も見てくれ
る？」

思ってサッカーがなされるし？ま、そのせいで怪我したんだけどな
あたしの口からしつかりとした声は出ず

「あ、わわわ！？」とか言う意味不明な言葉しか出なかった。

「それと、さっきの話。俺そついうのまじでほつとけないから
いきなり真剣な顔になった先輩に

あたしは思わずまた書類を落としてしまった。

「わわつす、すみません！」

「いいよ、俺拾うから」

書類を集めて、にっこり笑って「はい」と渡してもらったときには
あたしの頭の中はパンク状態・・・。

「とにかく、その書類作業終わらせなよ」

「あ、は、はい！ごほつごほつ」

息づいていった言葉の語尾にあたしはむせた。

「ふわああ・・・やつと終わった・・・」

ケータイを開くと、すでに8：30を回っていた。

学校から何も言われないのはあたしの権力って感じかな。

「あれ・・・先輩？」

どこにも見当たらないと思い、先輩と呼ぶと

後ろから「終わった？」と声が聞こえた。

「うわつ先輩、いつのまに後ろに?!」

「だーいぶまえにきたんだけど？」

「あ……すみません、まったく気づいてませんでした。」

「くっ！すごい集中力だな？さすが学年トップの成績だ」

「何で知ってるの!？」

「そこに張ってあったから。」

「あ……」

「ほら、はやく書類片つけてかえろっよ」

「そ、そですな」

あたしはなにを動揺してるのだろうか？

小さいころから友達に男ばかりで

そこからイケメン好きが発生したものの

男子に緊張することなんてなかったのに……

「ん？どした？」

「いえ……なにも」

この動揺は……なに？

* 第5話 *

「それじゃあ、この書類、職員室に届けてくるので待っていてください。」

あ・・・いや先に帰ってもいいですけどね」
苦笑つて、あたしは職員室に向かった。

職員室は生徒会室と実は一番離れている。
言えば学校の端と端にあつて行くのに5分はかかる。
この学園、無駄にでかいんだよな・・・

廊下にはあたしの上靴の音しか聞こえないものだから不気味で時々キョロキョロしてしまう。
暗いのはいつものことだけどなぜか今日は寒気がしてならない。

「早くいかないと・・・」
スタスタと歩くものやはり寒気がする。

「もういや!!」
あたしは猛ダツシユで廊下を走った。

職員室ドアの前であたしは胸をなでおろした。
暗いのはなくなったけど

寒気はまだして、気持ち悪い。
気持ち悪いけど先輩を待たせてるから職員室にツカツカと入った。

「失礼します。書類、置いときます」
「はい、ご苦労様です」

英語担当の西戸先生がココアを
おいしそうに飲みながら返事した。

「失礼しました。」

職員室ではあくまでも鈴架学園・生徒会会長・美原鈴羽なのだ。
真面目を突き通すに限る。まあ、会長だし。

職員室を出ると、そこには先輩が

壁に背中を預けて立っていた。

「先輩?!」

「迎えに来た。会長、いちいち往復するのもいやだろ?」

「いやまあ・・・はい。」

「俺だつて面倒くさいつてーの。ほら、帰るぞー」

「は、はい」

そつか、あの寒気、後ろに先輩がいたからだ

そう思ったとき、また寒気を感じた。

学校からあたしの家まではおおよそ15分程度の道のり。

まあまあ近いほうだとは思う。

「かいちよーなんか元気ないけど?」

「あ・・・えと、さつきから寒気がして・・・」

「寒気?」

先輩は後ろを振り向いたけど、誰もいなかったようで
また前を向いた。

「廊下歩いているときは、先輩が後ろにいるからかな・・・って
思ってたんですけど・・・」

「俺、かいちよーが行った後外の渡り廊下からいったから
それはないな」

「そうなんですか・・・ってそこ通るの禁止ですよ!」

「あ、そういえばかいちよーって会長だもんね、ごめんごめん」

「・・・むちゃくちゃ馬鹿にされてるような気がするんですが?」

「うん、馬鹿にした。ごめん」

「んもーっ！クシュンッ」

「何、寒い？」

「い、いえ・・・別に・・・クシュンッ」

「寒気って、もしかして・・・」

「へ・・・？ふわ・・・わわ・・・」

「美原？！」

先輩の声とともに、あたしの意識は途切れ

ああ、あの寒気は風邪だったんだな・・・と気づいたのだった。

第6話

「ん・・・ふっ・・・」

「美原、大丈夫か？」

「・・・先・・・輩・・・」

先輩の声にうつすらと目をあける。

その目の前には先輩がいた。

「わっわっわ・・・」

あたしは急いで起き上がった。

おきていきなりあの顔があったら

誰だってびっくりすると思う・・・。

「ちよい、じっとしてろ」

そついうと先輩はあたしの頬に手を添えた。

「まだ熱あるな・・・熱い？寒い？」

「あ、えと、あ、や、う・・・えと・・・」

さむ、さささむいです・・・」

何だ。この言葉。

宇宙人か！あたしは！

「じゃあ、布団一枚追加してくるわ。」

「あ、いやいいです！大丈夫です！帰ります！」

あたしは急いで起き上がり

ベットから下りた。

と・・・そのとき、あたしは体の力が抜てしまった。

「わ・・・」

「つと。まだ起きんな。ほら」

抱えられたまま、口に体温計をつっこまれ

あたしはなにもいえない状態になった。

「ん・・・」

すぐに抜かれ先輩はあきれた顔で

「38.5。こんなんで帰れるか。あほ」

「・・・ごめんなさい・・・」

「わかればいいんだよ、ほら、寝てる」

先輩はあたしのあたまをかき回して
違う部屋に消えていった。

「・・・んー・・・?」

あたしが目を覚ましたときには
部屋から物音もしなくて不気味だった。

ふと、手に体温を感じると思ってみると

あたしの手の上に先輩の手が重なっていて

先輩はベットに突っぷして寝ていた。

あたしはその寝顔に見とれてるわけで・・・

「先輩・・・かつこいい・・・」

あたしは先輩の髪の毛の撫ぜて
先輩の笑顔で癒されていた。

「ん・・・美原・・・?」

「わわっ！は、はい！」

「起きたか・・・大丈夫か？」

「え、あ、はい！まだ少しだるいですけど大丈夫です」

「そっか、じゃあまだ横になってる。」

「いや、でも・・・」

「いいから。会長、毎日6時間目から8時過ぎまで
ぶっ通しでやってたんだろ？」

そりゃ、体も壊すってーの」

「・・・すみません」

「まあ、これからは気をつけること。」

今度からは俺がちよいちよい呼んでやるよ」

「い、いやでも・・・」

* 第7話*

あたしはいつのまにか寝ていた。
だいが寝てたのにまだ寝れるとは
おそるべし、自分……！

『おにいーちゃん！あのね、今日ね！先生がね
お絵かき、上手だね、ってほめてくれたの！』

『おー、よかつたじゃん！鈴は本当に絵が上手だもんなあ』

『おにいーちゃんもお絵かき上手だよ〜？』
『鈴ほどじゃないよー？』

あれ……なに？これ……

『おにいーちゃんはね！鈴のおむこさんになるの！』

『あらあら、普通は反対よ？鈴がお兄ちゃんのお嫁さんになるのよ
？』

『そーなのお？』

『ええ、そうよ〜。』

『じゃあ！鈴、おにいーちゃんお嫁さんになるーっ』

『大きくなったらな？』

『うん！早く大きくなるっ』

……お母さん……？

お兄ちゃん……？

どうして？！なんでいるの？！

『それじゃ、少しでてくるな？鈴羽、いい子にまっつてな？』

『うん！パパ待ってる！ママもおにいーちゃんも！』

『ごめんね？それじゃいつてきます』
『よしよし、いつてきます』
『いつてらっしゃーい！』

お母さん！だめ、いつちゃだめだよ！……！
いつたら……いつたら……！

『きゃあああ……！……！……！』

『加奈子！お前、だれ』

『父さん！母さ』

『ママ……？パパ……？おにいーちゃん……？
お出かけ……行かないの……？』

やだ……なに、これ……

夢……？なんでこんな夢……

『パパア！ママア！おにいーちゃああん！

鈴いい子にしてるからあー！帰ってきてええ……』

『鈴……』

『鈴羽ちゃん……』

やめて……同情するような顔しないで……

『ねえ、あの子。ここ最近引っ越してきた子なんだけども』

『ええ、親御さんともども殺されて親戚の長井さんのところに、
引き取られたんですってね』

『本当に……かわいそう……』

『兄妹もなくされたんですってね』

『かわいそうに……』

やめてよ・・・かわいいそうとか言わないでよ・・・

『かわいいそうに・・・』

『かわいいそうに・・・』

やだ・・・！やだよ・・・

- k a n a y a -

「やだ・・・よ・・・」

隣で寝ていると、不意に美原の声が聞こえた。

「ん・・・美原??？」

「かわいい・・・そう・・・なんて・・・言わないで・・・」

美原、夢でもみてるのか・・・？

もしかして・・・

「お父さん・・・鈴・・・いい子にしてる・・・」

ご家族の夢・・・か・・・

俺はどうもこういうことには弱いらしい。

「俺・・・家族じゃねえけど・・・」

「お兄ちゃん・・・また・・・優しく・・・わら・・・って・・・」

おれはいてもたってもいられなくなり

家族でもなんでもないけど、返事をしてしまった。

「大丈夫、俺ここにいるから・・・鈴羽はいい子だよ」

俺がそういうと、美原はふわりと笑って

またリズムのいいかわいい寝息を立てて

寝たのだった。

- k a n a y a -

* 第8話 *

目を開けると、茶色の柔らかそうな髪があった。ボケー・・・とそれを見ていると急激にあたしの思考路が動き始め頬がピンク色に染め始める。

「あっ・・・あっ・・・あっ・・・!!」

そう、目の前には先輩の髪の毛。

先輩は本当にあたしの隣で寝ていた。

寝息が静かすぎて全然気づかなかった現状と今ここにいる自分の立場に

もう頭の中がぐるぐるぐるぐる・・・

不意に先輩が寝返りを打ち、こちらをむいた。

そのかわいい寝顔にあたしの顔から

今にも湯気がでそうな勢い。

「・・・かわいい・・・」

柔らかそうな髪の毛を触りたくて

手を伸ばすと、その手はつかまれ

驚いて先輩をみると、ニヤリと笑いながら

「おはよ、鈴羽」

と言ってきた。

「わーっっっ！すみません、すみません！」

「いやいやいや、全然いいんだけど。あ、てかおはようって言われ
たら

返すのが正義じゃなかったっけ？」

「あ・・・」

これはあたしが決めた鈴架学園の・・・ルール？掟？まあそんな感じの事。

「おはよう、ございます・・・」

「はい、おはよう」

今度はニコリと柔らかく笑う。

二人とも起き上がって、伸びをする。

先輩は笑ったままだった。

なんか・・・ずるいな、その笑顔

「いいな・・・その笑顔・・・」

「なにが？」

「・・・あたし、目つき悪いしあんまり笑えないから」

「そう？」

「・・・はい」

「まあ・・・確かにな。目つき悪いかじゃなくて

寂しそうに笑うことが大体って感じかな」

「・・・それ、目つき悪いからですよ」

「いいや、違うな。」

「そうですねっ!」

「俺の目に二言はない」

「なっ・・・」

「ほら、笑ってみろ」

頬を引つ張られ、あたしは先輩の方を抑えて

「いしゃい! (痛い!)」

と叫びまくった。

放してくれたけど、頬がジンジンする・・・

すると、先輩があたしの頬を撫でて

「大丈夫、鈴羽もきつと本気で笑えるよ」

その先輩の優しい目色にすきこまれそうだった。

「・・・あれ!? 今何時!？」

あたしは吸い込まれそうなのをとめて

今おかれてる現状に頭を戻した。

「いま8時」

「え?!学校、いかなきゃ!やばいいいいいつ
急いでベットを下りた瞬間

また体の力が抜けた。

「わ・・・」

間一髪、先輩に受け止められた。

あれ・・・まだ風邪引いたままなの・・・?

「会長、この一週間、何時間仕事した?」

「え・・・えと・・・2,4,6,8,10・・・12時間ちよ
くらい・・・?」

「・・・そりゃ体の力も抜けるわ。」

「へ!?!なにが?!」

「もしかして、徹夜で勉強したりした?」

「ウン、毎日。」

「・・・会計の仕事は何時間くらいした?」

「えっと・・・6時間くらい」

「仕事と別でか?」

「うん」

「・・・はあ・・・だめだこいつ。アホだ」

「は!?!なんでそうなるの!?!」

「ま。とりあえず今日は休みな」

「へ!?!いや、でも、別に学校ぐらいいけるし・・・」

「無理。そのフラフラさでいけるとでも思っのか?」

なら会長の頭は穴が開きまくりだな。」

「な・・・」

確かに先輩の言うことは正論だ。

だけど、正論過ぎてむかつく・・・

「休むにしても、とりあえず家に帰らないと・・・ですね」

「別にここにいとけばいいじゃん」

「へ!?!なんで!?!」

「いや、なんでもなにも。ここにいとけば、帰らなくてもいいしベツトもあるし、俺、面倒見れるし」

「いや先輩は学校に……!」

「別に俺学校すきじゃないよ。いつてもいかなくてもいい」

「……。そんなの、悪いです」

「じゃあ、俺が自ら面倒見たいって言ったら?」

「……。あたし知りませんよ」

あたしはまたベツトにもぐった。

もぐってるからだと思っけど、少しくぐもった声で

「ありがとうございますー」

となぜかお礼を言われたのだった。

* 第9話 *

ベットにもぐったものの

息苦しい。

とはいっても外には出たくないし……。

寝ればいいんだけど、朝の光を見ると寝れないんだよね……

「会長、朝飯なにがいい？」

「……いらないます」

「食欲ない？」

いや……そういうことじゃなくて……

「そんなところまで迷惑……かけたくないです」

「別に迷惑じゃないよ」

「……絶対迷惑ですよ……」

「んー……じゃあ、朝飯作って？それならいいだろ？」

「……わかりました。」

あたしはベットから這い出てきて

ゆっくりベットから起きた。

「なに、作ればいいですか？」

「んー、なんでもいいよ。会長がつくったものならなんでも」

「じゃあ……」

あたしはキッチンに行き、あるものを確認する。

（会長は家庭科5のA）

パンとハムとチーズと野菜もろもろと……（略）

まあ、パンハムチーズ卵があるならサンドイッチかな。

パンをナイフを取り出し半分に切る。

パンの耳を取って、次に卵を……

「かいちよー手際いいね？」

「?!」

後ろを向くと、先輩がニコニコしながら見ていた。

見ていた・・・というか見下ろしながら・・・（鈴羽155cm・哉也178cm）

「かいちよーちっちゃんねー」

あたしの頭をぽんぽんとたたきながら

「人形みたいー」とこれまたニコニコしながら言った。

「どーせちびですよ・・・」

「いやいや、可愛いから大丈夫」

そういうと腕を回してきた。

「なっ・・・え、えと・・・あの・・・」

「少しだけこうさせてくれない？」

その先輩の声は少し寂しそうだった。

「先輩・・・？」

「名前で呼んで」

「いやいやいやー！」

「だめ？」

「・・・哉也・・・先輩？」

「ん・・・」

先輩はなにかを思い出すように、笑い

「おいしいの待ってるよ」と言い残し

リビングに戻ったのだった。

「できましたよー？つてあれ、先・・・哉也先輩？」

お皿をもってリビングにいくと、先輩は見当たらず。

背もたれ越しにソファアをのぞくと

そこには先輩がソファア突っぷして、スヤスヤと寝息を立てて寝ていた。

「看病、してくれてたの、かな」

先輩寝てないんだな・・・

あたしはお皿を机に置いて、先輩に近寄った。

「・・・やっぱり可愛い・・・」

口角があがりっぱなしなことに気づき
即座におろす。

あぶないあぶない・・・。

「哉也先輩ー？朝ごはんできましたよー？」

一応呼んでみるものの、まあ案の定反応なし。

まあ仕方ないよね、うん。

先輩を起こさず、お皿をまたキッチンにもっていく。

先輩食べてないのに自分は食べるとかなんか微妙だから
二つをラップして冷蔵庫入り。

「先輩、床いたそう・・・」

そう思っつて、よっこらしょつと、ソファーにあげる。

あれ・・・むつちや軽い・・・

つて、なにを考えてんだ。あたしは。

さーて・・・先輩寝てるから

勉強でもしよっかな・・・

そう思い、先輩にタオルケットをかけて
英語の勉強に取り掛かった。

第10話

「えっと・・・この英語の訳は・・・」

とてつもなく英語が苦手なあたしは
だいぶ苦戦中。

基礎は普通なんだけど、入り組んでくると

こう・・・なんていうか、全部が全部記号に見えてくる・・・
後、リーリングのは得意だけどリスニングがとてつもなく苦手だ。

「もう・・・外国なんていかないんだから
英語なんていららないよー・・・」

そんな嘆きを言っていると

インターホンがなった。

「出ているの・・・かな？」

一応玄関まで行き、外を覗く。（先輩の家はマンションらしい）
と・・・多分先輩の友達か・・・彼女であろう人が立っていた。

「さすがに先輩起こさないよね、うん」

「ちよつと待つてください」と少し声を落として言い

サササとリビングに戻り、先輩を起こす。

「哉也先輩、お客さんですよー!」

先輩は「ん・・・誰・・・?」と言い

うつすらと目を明ける。

「えっと、先輩のお友達か彼女さんか知らないけど
とりあえず、いますよ」

「・・・小泉か・・・だりい。鈴羽出て」

「い、いやですよ。」

「っ・・・たく、面倒くさい・・・。」

「いいから、出てください。あたしはおとなしく待つときます」

「・・・じゃあね」

先輩は渋々玄関に向かい、ドアを開ける音がした。ちよつと気になったが、おとなしく待つとく約束だ。英語はもう嫌だから、数学でもしようかな・・・英語のセットを型付け数学の教科書とノートを出す。数学は公式とかに当てはめるのがほとんどだからとても楽しい。そういう勉強はかなり好き。

1 問目をといてるとき、先輩が戻ってきて

小声で「鈴羽、ベットに寝て！」と言ってきた。

意味不明だったが、かなり急いでる様子だからベットにもぐりこんだ。

すると耳元で「少しだけ待ってて」と言い

耳に何かをつけられたと思うと音楽が流れ始めた。

・・・イヤホンね。会話、聞かれないんだ。

そりゃそうだ。先輩が聞くような内容じゃないかもしれないし

もしかすると、小泉って人は彼女かもしれない。

あたしは大人らしく音楽を聴いて、待っていた。

第11話

おとなしく待ってる・・・といつても人間ってというのは欲がある。

・・・会話が気になってしまっ・・・。

悪いとは思った。だめだとは思った。

けれど、小泉って人が彼女ならなおさら聞きたいと思っってしまう。イヤホンを少しだけずらして会話を聞いた。

「で、あの子誰なの？」

「あの子ってどの子。」

「インターホンに出た子。そこに寝てる子だと思っけど」

「会長だよ。生徒会室に用あったから行ったら、

しんどそうにしてたからつれてきたんだよ」

「そんなの保健室にでも運べばいいんじゃない？」

「保健の先生は残念ながらも帰ってたよ。8時とかだし」

「なんでそんな時間に生徒会室にいるのよ！」

「別になんだっついていいだろ?!俺の勝手じゃねえか！」

「あたしっつて言う彼女がいながら、なんなのよ!まったく!

この、遊び人!最低ね!!」

「はあ?俺とお前はもう別れたんだ。そうだろ！」

「あたし別にあなたと別れたつもりないし!てか

あたと付き合っついてないっつて言うなら誰と付き合っつてんのよ!」

「お前に言う義理なんてねえよ！」

「どうせ、その会長とイチヤイチャしてるんでしょ?!」

「・・・はあ?んなわけないじゃん。」

「じゃあ遊び人？」

「・・・まあな」

「あつそう？じゃあ、あたしともまた付き合いなさいよ」

「お前に興味とかねえし」

「やっぱり会長は本気なの？」

「・・・わあった。付き合ってやる。だから、今日は帰れ。」

「ありがとう 今日の問題置いとくわね？後、メアド送ってね。変えたでしょう」

「・・・わかった。わかったからまじで帰って。」

「じゃ、明日一緒に登校しましょうね？」

玄関のドアが閉まる音がして。

先輩が近づいてくる音がした。

あたしは即座にイヤホンをつけた。

「鈴羽、もう、いいよ」

先輩はあたしのイヤホンを外して、話しかけた。

「哉・・・先輩。あたし、帰りますね。」

「は？いや、帰れないだろ・・・」

「大丈夫です。帰ります。朝ごはん、冷蔵庫に入れてありますから。

失礼・・・しますっ・・・」

あたしは鞆を取って、先輩の家を出た。

『どうせ、その会長とイチヤイチャしてるんでしょ?!』

『はあ？んなわけないじゃん。』

『じゃあ遊び人？』

『・・・まあな。』

・・・遊び・・・人・・・

あたしは後悔した。

欲でイヤホンをはずすんじゃなかった。

外さなかったら、あんな会話聞かなくてすんだのに・・・

とつかか・・・あたし、全然動揺かくせてないじゃない・・・

・・・あたしが・・・先輩の事、本気で好きって・・・
ばれちゃうじゃないの・・・

第12話

あたしはとにかく走った。

別に先輩が追いかけてくるわけじゃないけど

走った。いや、逆に言えば、追いかけてきてほしいのかもしてない。

ああ・・・なんて欲深いんだ。

走って、たどり着いたのは・・・何故か家族のお墓の前。

ほんとに・・・あたし、なにがしたいんだか・・・

てか・・・先輩の家からよくもまあ、お墓につけたものだよね・・・

「しかもこの前も来たよね・・・」

お墓の前でひざまずいて座り、備えてあるまだきれいなお花を
まっすぐに直して、手を合わせた。

お母さん、お父さん、お兄ちゃん。

あたし、好きな人に何も言わずふられちゃったみたいなの。

告白なんてしてないけど、ふられちゃうなんて

本当になさけないよね・・・

お母さんとお父さんはどうやって知り合ったの？

あたし、お母さんとお父さんのことなんにも知らないなあ・・・

娘なのに、ほとんど記憶がないってどうすればいいわけ？

お兄ちゃんとの記憶もほとんどないんだよね

もう・・・なにからなにまで最悪だよ・・・？

3分ぐらい手を合わせていた。

こんなことをしても家族は帰ってこないんだ。

てか・・・あたしいつからこんなにネガティブになったの？

そうだ、あたしは会長なんだよ。

鈴架学園 生徒会会長 美原鈴羽。

みんなから怖がられるような存在。

趣味はイケメン観察。

・・・決して、恋愛感情を持たない。

あたしはすくつと立ち上がり家の方向を向いて歩き出した。もう先輩にはかかわらないでおこう。

サッカー部の観察は・・・一時停止。

うん、それが一番の得策だよね。

あたしはスタスタと歩く。

スタスタ歩くものの、徐々に目の前がかすんできた。

「あ・・・れ・・・なに、あたし・・・今更・・・」

・・・なに、今更涙なんて流してんのよ・・・
とめたくてもとめられない。

お母さんたちが死んだときと一緒だった。

泣き止みなさいといわれても泣き止むことはできなかった。
悲しさで胸がいつぱいで

涙腺なんて壊れ済みだった。

歩く足がすくんだ。

・・・家に帰って、あたしはいったい何をするの・・・？

誰もいない家であたしは一人むなしく勉強するの？

好きじゃないリスニングをして、頭使つてなにになる？

ああ・・・こう思うと、先輩といただけで

なんか楽しかったな。別にこれといって話してないけど。

大体寝てたけど、なにか心地よいものがあつた。

あたしの家は冷たい。先輩の家は温かい。

差はきつと、心の問題。あたしの心は冷たすぎるのよ。

とにかく歩いていると、後ろからあたしを呼ぶ声があった。

「会長ーっ！！！！」

その声にあたしは目を見開く。

先輩・・・?!

後ろを向くと、先輩がツカツカとこつちに向かつてきていた。

そして、あたしの目の前まで来るとあたしを抱きしめて

「話、聞いてたんだろ」と言った。

「人間って欲深いものです・・・。おとなしく待とうと思っても待てないんです。イヤホンを外してしまいました。すみません」

「いや・・・あの状況で外さないやつは大体いないと思う。」

・・・小泉と付き合ってたのは嘘だから・・・」

その言葉にあたしは先輩を自分から離れた。

「別にいいじゃないですか。ただ、あたしが先輩のことを

一方的に思っていただけですから。」

「いや、でも・・・」

「そんなに罪悪感があるなら、最後に一つ、お願い聞いてもらえますか？」

「・・・何・・・？」

「・・・あたしに、また、ニコニコ温かい笑顔で笑ってください」

そういうと先輩はまたあたしを抱きしめて

「そんなお願い俺絶対聞かない。会長、もっと、もっと欲深くなくていいんだよ。」

会長の本当に思ってることを今、言ってよ」

先輩の真面目な声にあたしは思わず本音を言ってしまう。

「いやですよ・・・！先輩が離れちゃうなんて・・・！できることなら

ずっと、ずっと一緒にいたいです・・・温かい先輩の元にいたいです・・・っ

もう・・・あたしには今、先輩以外誰もいない・・・です・・・」
はっと気づいた時には、先輩はまたあつたかい笑顔で笑っていて

「よくできました。もう、俺会長離さないからね?」
と言
また、先輩の家にひきもとされた。

* 第13話 *

「ちよ、先輩！」

「名前で呼んでっつていったら？」

「今は関係ない……！」

「あるよ。俺、今さつき、会長の趣味の人、から会長の恋人に移転したんだよ？」

「っ……！んもっー！」

「ほら。とりあえず俺んち戻るぞ。」

「いや！あたし、もう家に戻らないと……！」

「さつき俺の元にずっといたいといったのはだーれだ。」

「なっ……／＼／＼／」

さつきの台詞をぶりかえされ

あたしの頬はかなり紅潮。

あたしの手をつかんで走る先輩の背中に思わず見とれる。

かっこいい……というか、頼もしい……と、というか……

てか……あたしの趣味でイケメン観察してたのに

どうしてこうなったのだろうか……

どこで道を曲がってしまった？

いやでもいい方向にいったよね……うん……

「会長、何考えてんの？」

気がつくともう先輩の家についていた。

「え？あ……いや……別に……」

「俺の背中眼見してたくせになにもはないだろ。ま、とりあえず入れ」

軽く言われたものの、あたしはかなりあせる。

「そんなにあせんなくても、大丈夫。」

先輩はリビングにあたしを促し、さっき作ったサンドウィッチを持ってきた。

「会長特製、愛情いっぱいサンドウィッチー」

「はあ?!」

「まあまあ。ほら、一緒に食べようよー」

先輩は満面の笑みであたしを迎えるものだからもうなにがなんだかさっぱりだ。

「もう・・・むちゃくちゃなんだから・・・」

床に座って、ふう・・・とため息をつく。

「哉也先輩ってほんと、ずるいですね・・・?」

「なにが?」

「・・・全部が全部ずるいです。サイテー」

「じゃあ、俺、もつとサイテーになってみるわ」

そついうと、先輩の顔が近くにきた。

と、同時に唇に温かい感触を覚えて

そのまま押し倒された。

「?!」

「いい?このまま、サイテーなことやっても?」

「だ、だ、だめですつっつ!」

「じゃあ、もつかい、ちよつとサイテーなことさせて」

先輩はまた、あたしの唇にキスを落とした。

「会長つてほんと、可愛いね?」

「?!/!/!/」

いまかなり、恥ずかしいこといわれたよね?!

もつっ!なんなのよ、ほんとに!

・・・結局、この結末は

会長はイケメン好きで

そこから始まった恋ってわけね・・・

なんか、イラっとするんだけど・・・
何気に先輩に主導権握られてるよね。今。
うわ。むかつく。

「もう、最低！」

あたしは先輩の頬にキスをして
サンドウィッチにがつついた。

先輩は少しの間放心状態だったけど
我に返り、あたしをみて、にんまり笑う。

「な・・・なんです、か？」

「鈴羽って、エッチだな。」

・・・は？いまなんつつた？

「エッチ・・・？」

「そう。エッチ。」

「・・・はあああ？！いや、ほかの人に言われたら百歩譲って許し
ますけど！」

哉也先輩だけは言われたくないですけど?!」

「まあまあ。取り乱すなって！。ほら、サンドウィッチ、たーんと
お食べ。」

「ふっざけんなああ！」

この先どうなるんだか・・・！
ほんとに、もう・・・
意味不明！

- e n d -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6933z/>

会長は・・・

2011年12月30日01時54分発行